

2. 香に関する「うつし」

3. 移しの香と移香

第三章 「うつし」に関する熟語「うつしごころ」「うつしいろ」
は省くことにする。

《注》

1. 板橋倫行校注「今鏡」107頁 朝日新聞社刊日本古典全書
2. 群書類従第二十六卷「世俗浅深秘抄上」457頁
3. 新訂 国史大系「延喜式後篇」左右馬寮975頁 吉川弘文館

お伽草子の性格についての一考察

— 恋愛物を中心に —

国文科四年三十五号 田 中 典 子

一、序

室町時代より江戸時代初期にかけて作られたお伽草子は、政権が貴族から武士へと移動した鎌倉時代後の、めまぐるしい変遷時期の文学として種々の特色がみられる。

南北朝の争乱後、下剋上という風潮が生れ公家は没落の色を呈し始めた。その反面、著しく抬頭した地方豪族、下級武士、富裕町人

4. 古今要覧橋器材部馬具 397頁

5. 今泉定介編故実叢書「後松日記」 弘文館

6. 群書類従「御禊行幸・服飾部類第三」 410頁

7. 統群書類従武家部二十五「諸鞍日記」 162頁

8. 新訂 国史大系「吾妻鏡」 536頁 吉川弘文館

9. 今泉定介編故実叢書「西宮記」 弘文館

10. 群書類従「飾抄」

は、経済力、社会的地位の上昇に伴い文化的教養を身につけようとし、彼らの要求に応じて、王朝物語を模倣したもの、民間説話、民間伝承、神伝普及を目的とした神仏の功德や本地の由来などが、国語風の口語りや、絵巻物、奈良絵本と共に、次第に書写されていった。そのために、王朝物語が貴族中心であったのが、お伽草子では武士、僧侶、庶民も多く登場し、更に、異類まで登場して多種多様になった。そして、舞台もさまざまになり、内容も、恋愛物を

はじめ、立身出世物、異類物、本地物、出世遁世物とあらゆる方面にわたっている。

このような理由で、お伽草子は、作者、読者層の拡大、内容範囲・趣向の多種多様性を第一の特色としている。

しかし、内容があらゆる方面にわたっているとはいっても、恋愛物は依然としてかなり多くの部分を占めて他を圧している。成立時期からしても、恋愛中心の王朝物語の影響は強く残っているし、また、新興階級を反映した新趣向などからは、貴族的公家的要素、あるいは庶民的要素など興味ある問題が見出される。そこで、恋愛物を中心にして、それらの問題をとおしてお伽草子の性格を考察してみたいと思う。

考察にあたり、「統群書類従」第十八輯上「日本文学大系」第九卷、「御伽草子」日本古典文学大系を使用した。

二、本論

第一章 お伽草子の語義及び分類について

伽の語源、御伽衆、お伽草子の語義、成立などについて、桑田忠親氏^(註1)、市古貞次氏^(註2)、荒木良雄氏^(註3)、柳田国男氏^(註4)、折口信夫氏^(註5)の説を引挙げたが、それぞれが異説をたてておられて、未だ定説というものがない。

その中で、わずかに共通点といえるものは、お伽は、何らかのかわちで、相手又は仲間がいたということ、ほとんど夜に行なわれたということである。

そこで、桑田氏の「御伽衆、御咄衆」より考えて、戦国時代に、御伽衆が職業人として現われる以前の、室町時代の武家、僧侶、公

家社会の人々、それに加えて町衆と呼ばれる新興階級の庶民たちの間で行なわれた御伽、つまり、その御伽の席で語られた話、あるいは絵巻物、奈良絵本の絵解などが、このお伽草子の中心をなしているのではないかと推定される。

次に分類であるが、お伽草子は、一作品中に題材となる数種の要素を含んでおり、単一な内容でない作品が多い。これは、第一の特色である内容の多種多様性が原因ともなっていて、たとえば、「物くさ太郎」は、恋愛求婚談、童話、立身出世談、あるいは本地物とるように、作品中の要素のとり方で、違った類別がなされているのである。

お伽草子の中には、もちろん純粋の恋愛物も数篇ある。しかし、「物くさ太郎」の例にもあるように、一作品中に数種の要素を持っている作品も少なくないのである。つまり、筋だけ迎れば恋愛物であるはずのものが、それ以外の要素の方が強くて読者に鮮明な印象を与えるため、その要素で種別されて恋愛物でなくなるのである。しかし、その要素には劣るけれども、恋愛要素も強く出されておれば、一応恋愛物的作品として考察の対象とするに十分足るのでそれらも恋愛物に入れてとりあつかうことにした。

第二章 恋愛物の性格

お伽草子の恋愛物を考察するに当たっては、主人公に身分的共通点のあるものを分類別にまとめて、比較、考察する方法が適当と考えられる。そこで、(1)公家物、(2)庶民物、(3)武家物(4)僧侶物、(5)異類物の順序に従って、恋愛物を分類し、考察して行きたいと思う。

まず、公家に関するものとして、「忍音物語」「岩屋草子」「鉢

かつき」「美人くらべ」などがある。「忍音物語」は擬古物語の系列をひく悲恋通世談であり、他の三篇は、落窪物語・住吉物語の系列をひく継子物である。しかし、継子物といっても、むしろそれは、後の恋愛を展開させるための糸口的なものと言える。

ところで、「鉢かつき」の女主人公は、地方豪族の姫君である。

その姫君が、しかも鉢を頭に被ったみにくい姿で公家と結ばれるに至る過程において、いくつかの難関を越えなくてはならない。しかし、それを克服するための条件がある程度、未然に準備されているのである。例えば、鉢を被ったみにくい姿にもまざる「手足の美しさ尋常げ」であり、鉢を被った様子には、中将に言わせると、

「楊梅桃李の花の香に、雲間の月のさし出(で)て、二月なかばの糸柳の、風に乱るゝよそほひも、籬の内の撫子の、露重げに物弱く、はづかしげにてそばみたる、顔の愛敬のいつくしく。楊貴妃李夫人も、いかでかこれにまざるべき風情を漂わせているのである。更に、最大の難関ともいふべき「嫁くらべ」の席に臨んだ時、鉢はとれて、しかも、その中から金銀財宝が現われ、又、公家出身の他の嫁たちに劣らぬすぐれた詩歌管絃の才能を發揮した。

このように、女主人公に貴族的風情、教養を最初から盛ることによって、身分的不自然さ、不合理性を感じさせないようにしているのである。言い変えるならば、身分的執着心の捨て難さの現われとも言える。

また、このような傾向は、下剋上の世相背景に、庶民(ここでは農民、商人、町人などを総じて庶民と呼ぶ)を総じて庶民と呼ぶ)を文芸上に浮び上らせた庶民物にも指摘することができるのである。

ところで、庶民物の恋愛の型は次の三つを指摘することができる。

- (1) 公家の若君と庶民の娘
- (2) 庶民と公家の姫君
- (3) 庶民と女房、遊君

(1)の例としては「文正さうし」がある。主人公は、関白殿下の御子二位の中将と鹿島の塩焼文正の娘であり、それにしても、中将が、富豪であるとはいえずをただせば塩焼の身分の者の所へ、商人に身をやつしてはるる鹿島まで下るのは、恋のためには身分の上下も障害とはならないとする恋愛至上主義の現われである。しかし、一方では、公家意識の低俗化、權威の低下とも言える。

ここで、一つ指摘しなければならないのは女性は無繁昌の手段としてむしろその出生が望まれ、祝福されたということである。それは「文正さうし」の左に引用する文章で明らかである。

「男子にてましまさば、大宮司殿にこそつかはれさせ給はんに、御かたちすぐれたる姫たちにて候へば、国々の大名、いずれか御にならせ給はざるべき、又は大宮司殿の公道と申(す)とも、御簪にならせ給ふべし、これほどしかるべきことなし」

このように、女性にとつては身分よりも容貌性質、詩歌管絃の才能が即ち実力であつて、「氏なくして玉の輿にのる」とは正しくこのことを言うのであろう。そして、身分、素性は低くても、富の力で自分の主の大宮司あるいは国司、大名の權威に屈せず求婚を退けるということには、下剋上の世相の反映が認められる。

次に(2)の例として「一寸法師」があげられる。一寸法師の恋愛というのは、京で身を寄せた宰相の邸で姫君を見せめ、「いかにもし

て案をめぐらし、わが女房にせばや」と思い悪賢い小細工をして姫君を得て、中納言にまで出世するのである。恋の成立においても、巢に策略と打出の小槌の威力のみによるのであって、少なくとも純粹な愛情は感じとれない。しかし、草子の終りに、策略による出世であるけれどもよき事として賞賛されているところには、下剋上の世相が認められる。

次に(3)の例としては「物くさ太郎」「猿源氏草紙」がある。「物くさ太郎」は、信濃の国の物くさ者であった彼が、京での賦役で急にまぬな男になり、その帰りに、清水観音で辻取をして妻を捜すところから話は展開する。ここで登場するのが歌の謎解きである。更に「猿源氏草紙」においては、五条の橋の上で網代の興の女性を垣間見、思案のあげく、大名に扮装して近づくことに成功する。これら二草子の恋の成就における重要な鍵は、和歌連歌の才能と次々に障害を乗り越えて目的を達しようとする行動力であった。

以上述べた四篇は、いずれも庶民を主人公にした恋愛求婚談であり、立身出世談である。庶民物として、農民、鯛売などの下層階級の者を主人公にしたことは画期的であり、下剋上を背景にした庶民階級の抬頭が感じとられる。

しかし、これらだけで、純粹に庶民物として呼べるだろうか。

なるほど、庶民的精神の盛り上り、立身出世に対する積極的な意欲、あるいは教養、知識欲の反映は随所に認められる。しかし、庶民として描かれた「物くさ太郎」「一寸法師」は、最後には、先祖を尋ねてみれば天皇、貴族であったというおちがっついていて、し「猿源氏草紙」にしても、大名に扮装しなければ相手の女性に近づけなかつたし、和歌という貴族的教養を備えさせていて、暗示的な

余韻を残している。もう一つの大きな理由は、庶民同士の恋愛談が一つもないということにある。

こうしてみると、庶民生活に定着した、庶民自身の題材を享受するということはなく、庶民の夢と願望が託された草子を読むことによって、期待と満足を味わっていたにすぎないと思われる。

次に、武家の恋愛については、「三人法師」「横笛草紙」「さいき」などがある。これらの草子には、いずれも武士とさる邸の女房との恋愛が描かれている。そして、その男女の仲を媒介している最も重要なものが和歌である。その場合、女主人公たちは女房という立場から、和歌の教養については改めて言うまでもないだろう。そして、その相手をつとめる武士たる彼等にも、当然和歌の教養が要求されている。もちろん、主人公たちは、和歌の教養は附加されているし、性格的雰囲気としても猛々しいところはなく、返って、恋の病に臥せってしまう(三人法師)など武士らしからぬ貴族的な弱々しさが感じられる。

このように、もっぱら「文武両道」を武士の理想像としているのではなく、前時代的なものへの憧憬、執着が、武士の世界にも多分に残存していることが窺える。

なお、筋書からみて、はじめの恋愛から一転して悲劇に終らせ、出家遁世させる描き方は、仏教思想盛んな、いかにも中世的な効果を醸し出している。

その仏教思想の繁栄が中世文芸に浸透したことは言うまでもない。お伽草子にも顕著に現われ、縁起、仏教説話など宗教的宣伝を目的にした草子をはじめ、前時代になく新しい題材を扱った創作物もみられ、僧侶の世界が広く描かれている。

中でも、児物語は、仏教小説の新境地を開いている。これは不自然な男色であるけれども、寺院生活をする僧侶たちにとって一つの慰みであり、唯一の艶色として描かれている。しかし、この児物語は決して悲愛遍世談に終っているが、なぜ、そのように設定せざるを得なかったのだろうか。

思うに、僧侶自身、男色が不自然な関係であり、理性を欠いた行為であるということ、暗黙のうちに悟っていたに相違ない。だから、仏教の神聖さ、高貴さが犯されないうために、児を普通の恋愛談に登場するような女性にみならず、つまり児の女性化を行い、あるいは真の仏道修行に入るための方便であるという風に説いて、その難を逃れようとしたのではないだろうか。

最後に異類物であるが、その恋愛の型には次の二つがある。

- (1) 人間と異類の恋愛（怪婚談とも言える）
- (イ) 男性が異類の場合
- (ロ) 女性が異類の場合
- (2) 異類同士の恋愛

異類とは人間と類を異にするもの、つまり、動物、植物及び無生物などである。その生物無生物に人間の心を賦与し、人間そのものとして行動させるという擬人化の趣向によるものである。だから、例えば女性ならば

「容顔美麗にうつくしく、心さまならびなく侍りて、春は花のものとて日を暮し、秋は隈なき月影に、心をすまし、詩歌、管絃にくからず」（木幅狐）

とあり、異類物と言って、恋愛の動機から成就に到るまでを人間同士の恋愛と比較しても、格別事新しいものは見られない。しかし、

異類物ならでは悲劇性、喜劇性には注意すべきものがある。

第三章 王朝物語の踏襲及び中世の新趣向について

第二章では、分類別に恋愛物を考察してきたが、ついで、王朝物語の貴族的内容、趣向を踏襲したものと、下廻上の世相を背景とした新興階級のもたらした新趣向について、項目別に述べてみたいと思う。

王朝物語の踏襲

- (1) 主人公の設定
身分的執着
- (2) 恋愛成立における和歌の贈

答

- (3) 恋愛の発端
垣間見の趣向
- (4) 舞台
京都中心
- (5) 仏教思想

中世の新趣向

- (1) 主人公の設定
「恋に身分の隔てなし」
- (2) 恋愛成立における和歌以外の方法

- (3) 恋愛の発端
辻取り
- (4) 舞台
地方へ拡大
- (5) 宗教思想の影響
申し子その他

(1)の主人公の設定であるが、平安文学ではほとんど貴族に限られていたが、お伽草子においては僧侶、庶民が加わり、更に、異類までも出現をみた。しかし、登場人物としては、依然として公家が多くを占めている。主人公が庶民であっても、一人一人を見ると先祖が天皇、貴族であったり、才能、教養、容姿など何らかの貴族的要素があつて初めて恋愛も成立していることは、既に述べたとおりである。

ところで、その容姿に関する描写の表現が甚だ類型的なのに気がつく。たとえば女性ならば、

「形ちは春の花、翡翠のかんぎしをやかに、青黛のまゆずみは、はなやかにして、遠山の桜にことならず。蟬娟たる両鬢は、秋の蟬の羽にことならず」(物くさ太郎)

「物にたとへば、楊貴妃、漢の李夫人、わが朝の衣通姫、小野小町、明殿の後、女御更衣と申(す)とも、いかでかこれにはまさるべき」(三人法師)

男性ならば、

「みめかたちにすぐれ、優にやさしき御姿、昔を申さば源氏の大將、在原業平かと申(す)ばかりなり」

と、このように、十中八九まで同様の美辞麗句に尽くされている。

これを言い変えるならば、平安時代に賛美され、憧憬された日本、外国の古今の美男美女は、中世にあっても変ることなく賛美、憧憬的であったということである。

ここで、次のような主人公たちの言葉を列記する。

(1)「いかならん賤の女の子なりとも、そのかたちすぐれたらん人ならば……」(木幡狐)

(2)「なみく／＼ならんものを、いかでか妻に迎へん。いかなる公卿殿上人の娘ならば、久しからぬうき世に何かせん」(のせ猿さうし)

(のせ猿さうし)

(3)「うき世に長らへば、いかならん殿上殿上人、関白殿下などの北の方ともいはれなん、なみく／＼ならん住居は、思ひもよらず」(木幡狐)

(1)については、「猿源氏草紙」に「高きも賤しきも、恋の道にへだ

てなければ……」という言葉があったが、これもまさにその意を伝える三位中将の言葉である。いわゆる、身分、家柄に拘泥しない下剋上の世相の反映された一思想として興味あるものである。しかし、(2)、(3)のような言葉は、王朝貴族、公家社会に対する異常なまでの憧憬と共に、身分、家柄に対する根強い執着心の現れを盛った結婚観とも言える一思想とみてよい。武士が政治社会、経済の実権を握るに到って、圧迫され失墜せられた中世の公家階級であったけれども、武士、庶民たちにとっては、やはり大いなる憧憬と願望の的であったのである。

次に(2)について述べていくと、和歌は貴族的雲囲気を持っており、内容、場面の構成上に変化を与え、技巧により醸し出す暗示的効果、あるいは抒情性を狙っての詠歌は重要な意味を持っていた。それゆえ、王朝物語の恋の成立において重要な役割を果していた和歌は、時代を経た中世のお伽草子においても大きな位置を占めていた。

中でも変わった和歌の趣向としては、「物くさ太郎」の「謎解き」がある。それは、後の物語を展開させる契機となり、恋愛の成就、ひいては立身出世の糸口として用いられている。更に、「猿源氏草紙」では、和歌の才能、知識を駆使させることにより、同じく恋愛成就の糸口とする趣向がとられている。

しかし、一方では和歌の趣向を全然用いずに、恋愛を成功させている草子もある。それは「一寸法師」であって、恋愛成功の手段としてずる賢い策略を用い、和歌の必要性を認めていない。それは、和歌の有する公家的要素に依存しない、つまり、恋愛における貴族的雲囲気、情趣を否定した恋愛の成立であり、下剋上という世相に

適合した新しい方法の出現といえる。

このように、和歌尊重の一方では、和歌の贈答に依存しない恋愛の成立が描かれ始め、以前の物語形式と違った趣向の物語が登場する傾向を示しているのである。

次に、その和歌との関係を保ちながら、王朝物語の名残りをとどめているのは、(3)の垣間見の趣向である。それは、恋愛の発端として、「猿源氏草紙」にも例としてあげられているように、源氏物語の柏木と女三の宮の話は余りにも有名であって、このお伽草子においても、描写は簡単ではあるが重要な役割を果している。

公家、あるいは上流階級の女性は、一般人前には滅多に姿を現わさない。しかし、そういう女性を登場させて、種々の階層の男性と恋愛させるため、それでいて貴族性、高貴性を失わせないためにも、この垣間見の趣向は不可欠であった。そこで、この矛盾、不合理性をとり除くために、その舞台を屋外に持っていく、例えば、「猿源氏草紙」のように五条の橋の上で川風に吹かれたようにして、垣間見の機会を与えるという趣向をとっている。なお、この垣間見を有効ならしめるためには、その女性の美貌は必要条件といわねばならない。

ところで、恋愛の発端の一つとして、「物くさ太郎」に「辻取り」という風習がみられる。本文中に、「辻取りとは、男もつれず、輿車にも乗らぬ女房の、みめよき、わが目にかゝるをとる事、天下の御ゆるしにて有(る)なり」と説明されている。これは、貴族の情趣を尊重する「垣間見」のような偶然な出会い和歌の贈答に依存した恋愛の成立を否定した。庶民の積極的な行動への意欲の表現である。

次に(4)の恋愛の行なわれる舞台である。平安時代の物語では、その殆んどが貴族の生活する京都中心であった。しかし、お伽草子では登場人物が広範囲に亘っているし、武士が関東から興ったということもあって、地方を舞台とするものが多くなっている。とはいえ純粹に地方だけの舞台はまれであって、立身出世、賦役、訴訟などのために京都に上ったり、その反面、「文正さうし」のように、素性もしれぬ庶民の娘との恋を成就するため、鹿島くんだりまで旅をする趣向というように京都と地方を結んだ場面構成を用いて、公家的色彩、と地方的色彩あるいは道行文の趣向を盛り込んだ変化に富んだ新しい内容のものが注目されるのである。これは、地方勢力の拡大が文学にも浸透した結果であって、お伽草子の特色である多様な多様性の一要因ともなっている。

ところで、平安時代に興った法華経、浄土教は、平安末期から鎌倉にかけての社会変動の激しい時期に、数種の新仏教として発展し、広く民間にも普及し、中世文芸にも大きな影響を及ぼしたことは、これまでも幾分述べてきたとおりである。

中でも、古代に発した子宝思想に基づき、中世の仏教思想に影響されて文学に現われたものに「申し子」がある。「子のない場合には、神仏に子どもが授かるようにと祈念することが行なわれた。これが申し子である。(その結果授けられた子ども申し子とよばれる)」との説明がなされている。「文正さうし」の二人の娘、「物くさ太郎」「一寸法師」もその申し子の一人である。

その他、随所々に仏教思想が流れている。例えば、女性の美貌を形容するのに、古今の美女の例を引くと同時に、三十二相、八十種好という仏像の美にも喩えている。更には、

「よし／＼是も前世の宿縁なり、かやうに物思ひかけらるゝも、今生ならぬ縁にてこそかくも有(る)らん」(物くさ太郎)

「人間の習は、一樹の蔭、一河の流れを汲む事も、他生の縁と申(す)也。ひと村雨の雨宿り、いづれもこの世ならぬ縁とこそ、

聞(き)伝へ候へ」(横笛草紙)

とあるように、男女の仲までも仏教に基づいた思想の上に成り立っているのである。

お伽草子に反映した中世仏教の中の三例について述べたけれども、その他、神仏の利生、神仏の加護、靈験、出家遁世、極楽往生などの例をみるだけでも、いかに仏教色が濃厚であるか、ひいては、中世が、いかに仏教の普く浸透した時代であったかが窺われるであろう。

三、むすび

お伽草子の性格について、恋愛物を中心に考察してきたが、歴史的に、中世という過渡的位置における特殊な性格を含んでいることがわかる。それは、平安時代の王朝物語からの影響を受けると同時に、中世の下剋上の世相、仏教思想の反映があり、両者が相交錯して、草子の中に存立しているからである。

それが、最も顕著に現われているのが恋愛物であった。例えば、恋愛の型としては、登場人物が広範囲になった関係上、種々の階級の者との恋愛が描かれている。それに伴って題材の新趣向がみられるが、恋愛の趣向については、貴族的情緒を尊重する傾向が多分にあるため、王朝物語の様相を呈し、それに仏教思想を交えた恋愛の成立に仕立てている。

その他にも、貴族的な趣向、庶民的な趣向を具体的な例を用いて考察した結果、庶民の抬頭が著しく感じられるけれども、彼等のその積極性や意欲は、究極的には、富と優雅な公家的生活、公家的教養、都へのおこがれに他ならず、依然として、身分的執着の根強さが指摘される。

こうした内容から考えてみても、お伽草子は、折口信夫氏や島津久基氏が述べておられるような老幼婦女子を相手とするものではなく、その読者層、作家層については、本論第一章でも述べたように、室町時代の武家、僧侶、公家社会の人々、それに加えて町衆と呼ばれる経済力、教養のある新興階級の人々とすることが、最も妥当だと思われる。

そして、このお伽草子に、より庶民性が加わり、近世初期の啓蒙思想も反映して、教養の低い人々の知識、教養と娯楽を提供するものとして、仮名草子が出現するのである。

以上の考察から、読者、作者、主人公として、庶民が新たに加わった文学として、中世の新時代的な趣向や感覚の萌芽、盛り上がり認められるけれども、それらは、貴族性を脱皮することができず、むしろ、尚古思想に内包された文学として性格づけられるに到ったのである。

注1 「御伽衆・御咄衆」

中世文芸と民俗

注2 「中世小説の研究」

注3 「中世文学事典」

注4 「御伽噺と伽」

(定本柳田国男集七)

注5 「お伽及び咄」

(折口信夫全集十)

注6 日本文学大辞典